

令和元・2年度
東京都教育委員会
持続可能な社会づくりに向けた教育推進校



成果報告会資料



東京都立永福学園 高等部就業技術科

目次

- 1 はじめに＜校長挨拶＞
- 2 研究の骨子
- 3 研究の経過（1年目）
- 4 研究の経過（2年目）
- 5 教科等横断的な取組について
- 6 永福学園手帳について
- 7 取組の成果と今後に向けて

1 はじめに〈校長挨拶〉

まず、令和元・2年度 持続可能な社会づくりに向けた教育推進校 成果報告会資料をお読みいただいている皆様に心から御礼申し上げます。また、このような貴重な取組の機会をいただきました東京都教育委員会の皆様にも、感謝の意を表します。

私が都立特別支援学校（当時、盲・ろう・養護学校）の教員になったのは、今から30年以上前のこととなります。当時と現在の状況を比べると、教育環境も内容・方法も整理され、計画的、系統的に実施できるようになったと言えます。私は、後期中等教育段階の知的障害教育を中心に携わってきましたが、学校行事中心で学校生活の充実を図ることに力点を置いた教育から、卒業後の生活を具体的に想定し、その生活に必要な能力育成に力点を置いた教育に転換したと感じています。

実際、30年前には想像もできなかった、むしろ、知的障害者には担うことができないと思われていた活動を、生活の中心に置いている卒業生が増えてきています。具体的には、事務系の職務や接客や接遇を伴う職務での就労のことですが、このような職務は判断力がたいへん求められますので、ほんの20年ほど前までは、このような職務を中心とした企業等を進路先に想定することは、まずありませんでした。それが今や、知的障害特別支援学校の卒業生の多くが、このような職務を担っています。また、その他の職務を担っている卒業生も、様々な形で判断しながら職務を遂行することを、企業等の方々から期待されるようになってきています。

これらのことから私は、現在の特別支援学校の教育も道半ばであり、今後、幼児・児童・生徒の能力を、さらに開発し、引き出す教育に進化できるのではないかと考えています。

令和元・2年度に、本校で持続可能な社会づくりに向けた教育の推進に取り組んだのは、このような思いからであり、今後、障害のある人々がそれぞれの生活の中で、今以上に能力を発揮し、生きがいややりがいをもって生きていけるようになることを願うからです。

結びに、本取組に惜しまぬ御助言と御協力をいただいた「たすく株式会社」様に謝意を表します。また、実際に指導に当たった教員と、何よりもこの一連の学習に取り組み、様々な事柄を調べ、協議し、解決策を出してくれた生徒たちに、本資料をお読みの皆様からお褒めの言葉をいただきたいと願っています。皆様からの賞賛が、彼らのこれからのさらなる成長と生涯にわたっての糧となります。何卒よろしく願い申し上げます。

令和3年3月 東京都立永福学園

校長 伏見 明

2 研究の骨子

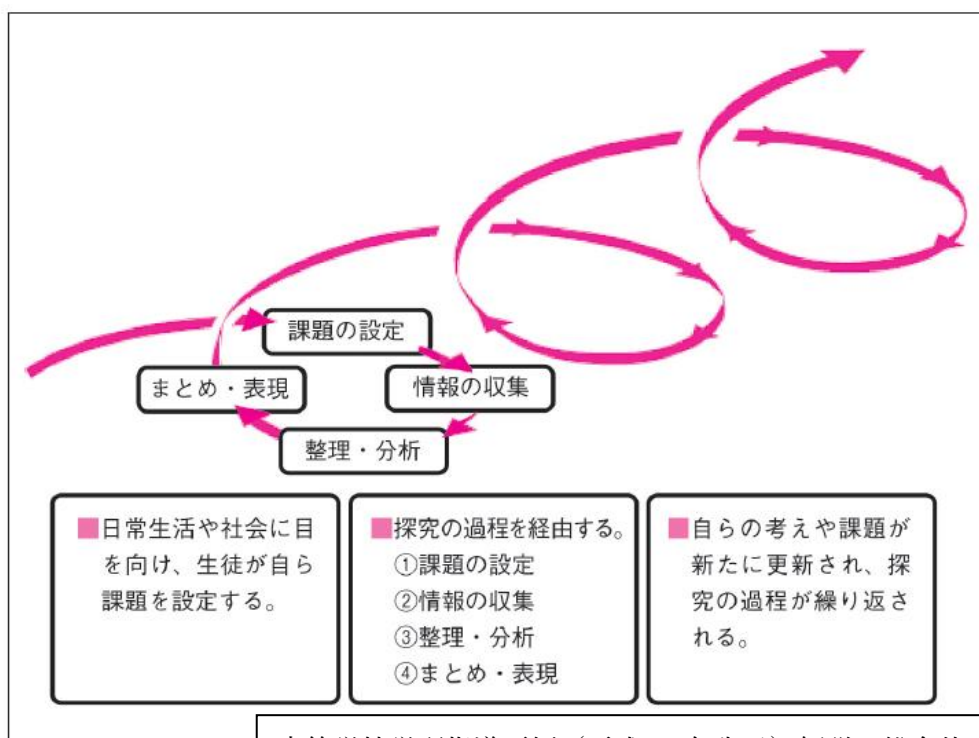
本校が持続可能な社会づくりに向けた教育推進校の指定を申請した背景には、社会情勢などの急速な変化に伴う2点の不安要素がそのきっかけとして存在する。1点目は、本校（特に就業技術科）卒業生が働く企業等の就労環境の変化や生活環境の変化に対する不安であり、もう1点は、自然破壊や気候変動、国際情勢などによる世界の持続可能性に関する不安である。それぞれの不安に対して、本校の教育活動をどのように進めていけば良いのかを、新しい学習指導要領に則って考えることができるのではないかとこの前提から、推進校に名乗りを上げた。

就労環境や生活環境の変化に対しては、定型の職務を主とする働き方から、「自ら判断し、進める働き方」への転換が必要であると考えている。それは、新学習指導要領の「思考力・判断力・表現力等」の育成に沿うものである。

自然破壊等の世界の持続可能性に関する不安に対しては、自分が知らないところで起きている問題・矛盾、見過ごしている問題・矛盾への気づきが必要であると考え、それは、新学習指導要領で示された「学びに向かう力・人間性等の涵養」に沿うものであると考えた。

これらのことから、今回の推進校としての実践を教科等横断的に行うことは、各教科等の中で新学習指導要領に対応した指導につながるものであると考えている。

一方、思考力・判断力・表現力等は、知的障害の本質に関わる能力であるため、単に「考えなさい」と求めても、生徒の苦手なことを強いることになり、成果を得にくいことが予想される。そこで、本校は、考え、判断し、表現するパターンを、まずは生徒に体得させることが重要と考え、その実践と並行して、自ら課題を設定し、課題解決に向けた取組を行う中で、思考力・判断力・表現力等の育成を図ることとした。



3 取組の経過（1年目）

1年目においては、持続可能な社会づくりに向けた教育を推進する上で、生徒に身に付けさせたい資質・能力として、

- (1) 社会の諸課題を解決する意識
- (2) 物事を多面的に捉え、選択し、実行できる能力
- (3) 議論等を活用した相互承認

を挙げ、それらを達成するために、以下の3観点から取り組むこととした。

【授業改善に向けた取組】

諸課題に関する生徒同士の議論等により、解決策を探究する授業を実施する。

基礎的な既習内容に基づき、学年進行に従い、生徒同士が議論する学習形態を増やす。

【教科等横断的な取組】

第1学年が翌年度12月に実施する修学旅行に関連させ、文化や気候、統計や環境保護と観光振興等の問題などを探究する。（「社会科」、「理科」、「数学科」、「情報科」）

最も適した解決策を見いだしていくための思考力・判断力・表現力等を向上する。（「国語科」、「総合的な探究の時間」）

【外部人材の活用】

諸課題の解決に向け、探究型の指導の在り方に関する指導・助言（学識経験者）

知的障害のある生徒の思考力が向上することを検証するためのアセスメント等の定期的実施及び教材開発の指導・助言（療育専門機関）

授業改善に向けた取組としては、研究授業として、第1学年社会科の授業において、探究カードを活用した授業を行った。

教科等横断的な取組については、まず、各教科等での学習内容と関連付くよう、修学旅行の目的地を沖繩に変更することを検討し、見学先や学習内容等の整理を行った。

外部人材の活用としては、(株) NOLTY プランナーズ、たすく (株) に御協力いただき、指導で活用する探究ノートや手帳の開発に向けて、研修会の実施や情報提供、御指導をいただいた。

<研修会の実施>

日時 令和元年 8月 26日

場所 本校会議室

内容

講演 「現代社会で求められる探究活動の意義と育成の方法等について」

株式会社 NOLTY プランナーズ営業本部 小竹森 直子 氏

講演 「探究活動に必要な見通しをもつ力の育成について」

たすく株式会社 代表取締役 齊藤 宇開 氏

講演では、両者が開発している「探究ノート」、「思考手帳」についての紹介を交え、生徒の探究活動やそれを進めるための思考力の育成について、具体的な方法論についての助言をいただいた。

<研究授業の実施>

日時 令和元年 10月 16日

場所 本校 1年 2組教室

第1学年の社会科の授業を対象に、研究授業を行った。探究活動のための教材研究を進め、対象の授業では、活動の流れごとに1枚のカードを使用し、生徒が手順を追って探究活動ができるような工夫をして取り組んだ。



第1学年 社会科 学習指導案

第1学年 2組 10名

1 単元名 「世界の国々のことを知ろう」

2 単元の目標

- (1) 国旗カードを選び、地図上のどこにあるのか確認できる。
- (2) 教科書や国旗カード、地図帳の情報から、選んだ国の特徴を考えることができる。
- (3) 選んだ国について、関心を高めることができる。
- (4) 調べたことを発表できる。

3 評価規準

	ア 社会的事象への 関心・意欲・態度	イ 社会的な思考 ・判断・表現	ウ 資料活用の技 能	エ 社会的事象につい ての知識・理解
単 元 の 評 価 規 準	・活動内容が分かり、 意欲的に取り組もう としている。 ・世界の国や地域につ いて、国旗や地図を 通して興味をもって 知ろうとしている。	・国旗カードのヒン トを見ながら、地 図帳を使い、選ん だ国の位置を探す ことができる。	・国旗カードのヒ ントや教科書の さくいんを見 て、選んだ国の 特徴を読み取っ ている。	・日本との関係や、世 界の中での役割につ いて理解する。
学 習 活 動 に 即 し た 評 価 規 準	① 学習内容を理解 し、学習に取り組 もうとしている。 ② グループの発表を 聞いて、世界の 国々について関心 をもち、調べよう としている。	① 地図帳や教科書 から、選んだ国 の特徴を予想す ることができる。 ② 国旗カードのヒ ントを見て、国 の特徴を考える ことができる。	① 国旗カードのヒ ントや教科書の さくいんを見 て、選んだ国に ついて調べること ができる。 ② 選んだ国につい て、分かりやす く説明内容をま とめることがで きる。	① 地図帳を使い、選 んだ国の産業や文 化について関心を もち、世界の中 での役割について理 解する。

4 単元について

本単元は、特別支援学校高等部学習指導要領[社会](6)「各種の資料を活用し、外国の自然や人々の生活の様子、世界の出来事について知る」の内容を取り上げ、「世界の国々の自然や生活の様子を知ること、それらの国々に住む人々の暮らしの様子などに興味・関心をもつ」を受けたものである。本単元は国旗カードを使い、色やデザインを見て、何という国名なのか、どこにあるのか、どんな特徴があるのかを調べることを目標としている。国旗の成り立ちから、その国の歴史や文化についての関心を高め、調べたことを発表することも目指した。

5 SDGsとの関連

[関連目標①]

貧困の問題は国内外を問わず深刻な課題である。ニュースなどで見たり聞いたりする機会も多く、アンケートの数値から、関心が高いことが表れている。貧困の原因は様々であるが、地形や歴史、文化によるところも大きい。本単元では、世界の国々をターゲットにしており、そこから貧困問題を考え、解決策を探ることが期待される。

[関連目標⑪]

都市問題も世界の国々の大きな課題である。政治や経済等の諸課題の解決のためには、国や地域の枠を超えた問題解決が必要である。本單元では、国や地域の歴史や情勢を調べることで、国や地域の特徴を知り、時事問題にも関心をもたせながら、解決策を探ることも期待している。

[関連目標⑫]

平和と公正の実現も大きな課題である。本單元では、国や地域を調べ、我が国との関係も調べることで、国際機関の果たす役割も視野に入れ、平和の大切さを学ぶことで関心を深めていきたい。

6 他教科との関連

本單元は、今後進めていく修学旅行（沖縄）の事前学習に向け、学習の進め方を身に付けるというねらいがある。関連目標①、⑪、⑫を取り扱うことを想定し、総合的な探究の時間や国語科、理科、社会科、数学科での学習において共通の進め方を取り入れることで、生徒が相互の学習内容を関連付けて考えることができるようにしていきたい。

7 生徒の実態

1年生10名のクラスである。入学後、東京の地理、日本の歴史時代区分（縄文時代～昭和）の学習を行い、10月から地理の学習を実施する。中学時代の既習内容に差異があり、社会の知識に差がある。授業はワークシートを活用し、教科書や資料教材を見ながら該当する事項を発見して記入していく方法が多い。本單元では、座学だけではなく、カードを探したり、ミニホワイトボードを活用したりするなど、主体的に学習を進めていく学習方法で取組んでいく予定である。

8 研究に迫るための手立て

(1) 探究カードの使用

ア 現在、民間業者の協力で探究ノートの試作を検討中である。この探究ノートは、探究活動を進めるスタイルを身に付けるための学習ツールとして、総合的な探究の時間や社会科、理科、職業科などでの活用を想定している。

イ 本單元では、ノート形式ではなく、探究カード（試作）を活用する。生徒が手順を追って書き込みを行う点を生かしつつ、ホワイトボードに貼ることで、発表できるように工夫した。

1年 社会 探究カード 「世界の国々のことを知ろう」

1年 組 氏名()

チーム名()

メンバー()

1年 社会 探究カード ①探す 選ぶ

① チームで相談して国を選びます。

① 探す 選ぶ

1年 社会 探究カード ②場所探し

② 選んだ国の国名と、その国(くに)の場所(ばしょ)を地図(ちず)や地球儀(ちきゅうぎ)を参考に調べてください。

② 場所探し

その国(くに)の(まわ)りには何がありますか？(海、大きな川、湖など)

1年 社会 探究カード ③調べよう

③ 選んだ国(くに)の(まわ)りのことを調べよう。

③ 調べよう

国を調べたカードで相談して決めます。みんなに聞いてみましょう。

1年 社会 探究カード ④まとめよう

④ 選んだ国(くに)について考えをまとめよう！

④ まとめよう

チームの意見をまとめて記入しましょう。

(2) 手帳の活用

ア 探究ノート同様、手帳の作成も研究として進めている。手帳を活用することで生徒は中・長期的な目標、短期目標をもち、日々の記録から振り返りを行うことができる。

イ 本単元では、手帳は使用しない。

9 単元の指導計画と評価計画 (全3時間)

時	目標	主な学習内容	評価規準 (評価方法)
1	・国旗カードを選び、地図上のどこなのか確認できる。	・国旗カードを選び、色、デザインなどの違いを考える。 ・カードのヒントを見て、地図帳から国や地域の位置を確認する。	ア① イ①② (観察、探究カード)
2	・教科書や国旗カード、地図帳の情報から、選んだ国や地域の特徴を考えることができる。	・国旗カード、教科書、地図帳から、選んだ国や地域について調べる。	ウ①② エ① (観察、探究カード、ホワイトボード)
3	・選んだ国や地域について、関心を高めることができる。 ・調べたことを発表できる。	・選んだ国や地域について、調べたことを発表する。	ア② エ① (観察、探究カード、ホワイトボード 発表)

10 本時 (2 / 3 時間)

(1) 本時の目標

教科書や国旗カード、地図帳の情報から、選んだ国や地域の特徴を考えることができる。

(2) 展開

時間	○主な学習内容 ・予想される生徒の反応	◆指導上の留意点、配慮事項 ◇評価規準 (評価方法)
導入 10分	○正しい姿勢をつくる。 ○挨拶 ○前時の授業を振り返る。 ○本時の学習内容と目標を知る。 ○本時の活動内容について流れを確認する。 ・カードの使い方の質問をする。 ○チーム (3人~4人) 毎に話し合いや探究活動をしやすい位置に移動する。	◆姿勢保持のポイントを押さえて必要に応じて言葉掛けをする。 ◆本時の学習で活用する教材を提示しながら分かりやすく説明する。

<p>展開 35分</p>	<p>○前時に選んだ国旗カード、探究カードを確認し、本時に調べる国や地域を確認する。</p> <p>○地図帳、教科書、関連資料を見て、探究カードに記入する。</p> <p>・資料から情報を見つけた際は、それが適切な情報かを相談しながら考える。</p> <p>○探究カードをホワイトボードに貼り、見やすく体裁を整える。</p> <p>・発表の役割分担について相談する。</p>	<p>◆何をどう調べるのか、机間指導しながら適宜ヒントを出す。</p> <p>◆主体性を重視、過度な言葉掛けやヒントは出さない。</p> <p>◇学習内容を理解し、学習に取り組もうとしている。(観察)</p> <p>◇地図帳や教科書から、選んだ国や地域の特徴を予想することができる。(観察 探究カード)</p> <p>◇国旗カードのヒントを見て、国の特徴を考えることができる。(観察 探究カード)</p>
<p>まとめ 5分</p>	<p>○まとめの話を聞く。</p> <p>○次回の発表について聞く。</p> <p>○挨拶、片付け</p>	<p>◆探究カードに記載した内容に触れ、次回に向けた情報の整理の手掛かりとする。</p>

11 振り返り

- (1) 成果 国旗カードを活用したことにより、世界には様々な国々があることや類似したデザイン、色等の共通点を発見することができた。ニュージーランドやオーストラリアなど英連邦加盟国の国旗の類似やイスラム教を表す月と星をデザインした国旗など、その国の歴史や文化が関係していることを発見することができた。そこから、単元の目標(2)で示した、「選んだ国や地域の特徴を考えることができる。」について、生徒の思考を深めることができた

と考える。

探究カード(ワークシート)を使用することで、自分自身で考えて学習することができた。



- (2) 課題 外国に対する興味・関心をもつことで、その国や地域の諸課題を見つけさせたかったが、具体的な映像や資料等工夫が必要であった。

持続可能な社会づくりに向けての問題意識を高めるために、世界で課題となっている諸問題を具体的に示して探究できる工夫が必要であった。

<シンポジウムの実施>

日時 令和2年1月21日

場所 本校会議室

シンポジスト

株式会社 NOLTY プランナーズ営業本部 小竹森直子氏

たすく(株)代表取締役 齊藤宇開氏

本校校長 伏見 明

株式会社 NOLTY プランナーズ 小竹森氏による「探究ノート」の紹介

探究ノートは、探究活動をより効果的に進めるため、枠組み、手順に沿って考えることができるよう、あらかじめ枠などを設けた教材である。

当日は、「未来の信号機を考える」というテーマの下、ワークショップ形式でノートの紹介をしていただいた。まず、信号機に関する疑問について思い付くままに書く枠が用意され、そこで出された情報を材料にして、未来の信号機を考えるという手順で進めることにより、漠然と考えるよりも具体的で豊富なアイデアが出やすくなるということであった。また、個人作業でワークシートに記入していく活動の後に、対話的な活動を設定することで、双方の長所を生かしたり、組み合わせで違うアイデアを出したりするなど、探究活動の推進が期待できるとのことであった。実際に流れに沿った活動を行うことで、参加者が実感しながら学ぶことができた。

たすく(株) 代表取締役 齊藤氏による「思考手帳」の紹介

思考手帳は、論理的思考力、内発的動機付け、強化システムの理解などの育成を目指し、それを日常的に繰り返し取り組むことができるよう、手帳として教材化したものである。

その論理的な背景として、「報酬系ネットワーク」、「流動的システム」、「ワーキングメモリ不全への対応」、「動作性優位」、「構造化が有効」、「内発的動機付けと外発的動機付け」、「四語文と接続語による文章化」、「自己調整学習者としての予見、遂行コントロール、メタ認知」の8項目について解説をいただいた。

療育場面での手帳活用について、事例を交えながら紹介いただいた。公開を前提とした手帳と捉えており、ソーシャルネットワークサービスのような直接的な反応を大切にしているとのことであった。

(本シンポジウムで取り上げられ、その後実践を進めた永福学園手帳については、「6 永福学園手帳について」にて詳細を記載。)

本校校長 伏見から取組についての報告

社会の変化に対応する力や、それを主体的に考える力を育てていくことが、これからの社会を生きていく上で必要になる。一方、知的障害のある生徒にとっては、「思考する」こと自体に課題があるので、そのまま頑張らせても難しい。だから、そういった「思考する」活動のパターンを身に付ける指導ができないかと考えた。

今回推進校としての取組に候補校として申請した経緯と、これからの時代を生き抜く上で、生徒の思考力を育てることが、学校教育において非常に重要であるとの見解を述べた。

3者の発表の後のディスカッションでは、紹介のあった2点の教材について、利用場面やねらいの違いなどから、下表のように整理された。

探究ノート	思考手帳
授業での使用	日常的な使用
プロジェクトのPDCAでの場面	自己のPDCAでの場面
他の生徒と協働して思考し、学習する。	個人内で思考を繰り返し、活用する。

2点の教材の特徴を生かし、相互補完的に活用することで、論理的思考力の育成を進めていくことができるのではないかとまとめることができた。

その他、授業をどのように探究型にしていくのか、「正しく事象を捉える」という探究活動の根幹についての理解の浸透など、今後の実践に向けての課題もいただくことができた。

4 取組の経過（2年目）

推進校の2年目の活動は、1年目の活動を踏まえ、具体的な取組として、

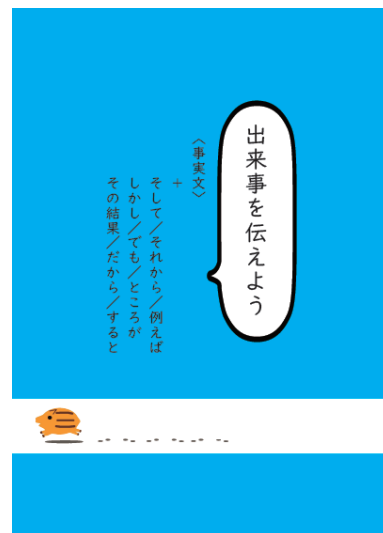
- (1) 第2学年の修学旅行（沖縄）を軸に、教科等横断的な学習とそれを材料とした探究的な活動を行う。
- (2) 思考手帳を参考に、本校生徒を対象とした手帳を作成し、活用する。

の2本の柱で取り組むこととした。

しかし、新型コロナウイルス感染症拡大による臨時休業期間などがあり、年間指導計画の再編成が余儀なくされた。沖縄への修学旅行も、実施の可否も検討を余儀なくされ、最終的には次年度への延期という判断をした。

年度内に、学習のゴールとして設定していた修学旅行の実施はかなわなかったが、そこに向けて各教科等での学習は進めていたので、次年度に延期となった修学旅行に向け、探究活動は継続して取り組むこととした。

手帳の活用については、たすく(株)が開発した思考手帳をベースに、本校に通う、軽度知的障害がある高等部生徒を対象をしぼった場合に考えられる修正点などについて、電子メールやオンライン会議による協議と、それを踏まえた校内での検討を繰り返し、10月から第1学年・第2学年での利用を開始することができた。



2年目の2点の実践については、「5 教科等横断的な取組について」、「6 永福学園手帳について」に記載している。

<研修会の実施>

日時 令和2年10月1日

場所 本校会議室 視聴覚室 (リモートで2会場にて実施)

内容

講演 「探究活動に必要な見通しをもつ力、論理的な思考力を身に付けるために
～思考手帳が生徒にもたらす変化について～」

たすく株式会社 代表取締役 齊藤 宇開 氏

今回の研修は、手帳の活用の開始に向けて、昨年度より繰り返し御指導をいただいている齊藤氏から、あらためてそのねらいや設定の根拠、実際の活用事例などについて御指導をいただく機会として設定した。会は2部制として、第1部は教務部を中心とした推進事業のプロジェクト担当教員を対象、第2部は学科教員全体を対象として行った。

第1部では、手帳の内容を検討する過程での課題等について、質疑応答の形式で実施した。生徒の実態に応じてどのように対応すれば良いのか、学級での一斉指導場面が中心となることから、個別対応に比重をかけられない中での取組の進め方などについて御指導をいただいた。

第2部では、前年度の研修やシンポジウムで示していただいた、8点の理論的背景についてあらためて解説していただくとともに、特に4語文+接続語による文章作成について説明していただいた。

- ・発達障害は、「我—それ (I-It relatedness) の関係」(僕は、リンゴが食べたい など) の理解は発達させていても、「我—汝 (I-Thou relatedness) の関係」(特定の人々を客観的に観察) の理解に困難があること。
- ・理解できる「我—その関係」を四語文(主語、補語、目的語、述語)で発展させていきながら、その「型」をもとに、「我—彼」(特定の人を客観的に観察)、「我—彼ら」(特定の人々を客観的に観察) の関係へと進めていくことを目指す。
- ・「関係の理解」のための論理力の向上に向け、言語技術教育から始めることを提案している。

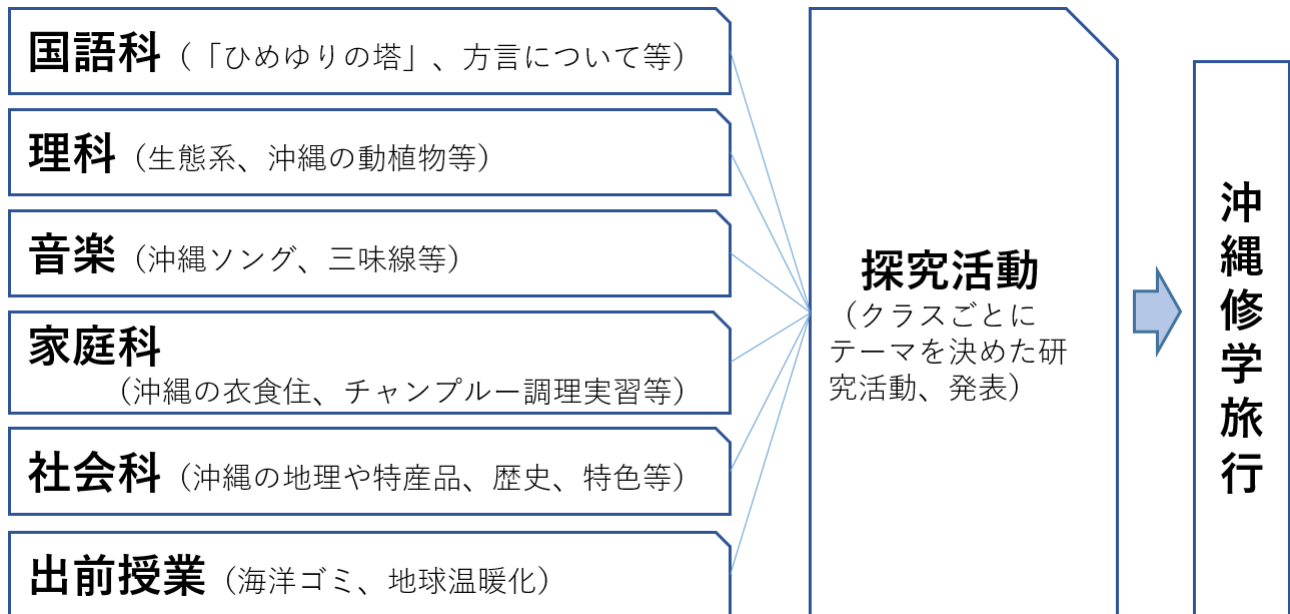
- ・自分(一人称)を主語として、四語文(主語、補語、目的語、述語の順)で、文型や構文の決まりに沿って作成することから始める。
- ・四語文をもとに、接続詞を使って、「抽象と具体の関係(それは、例えば等)」、「対立関係(しかし、でも等)」、「因果関係(その結果、だから等)」の作文をする

- ・言語を思考に用い、論理力を高めるために、①主語、補語、目的語、述語の事実文の作成 ②(教科指導などで)比較や性質を調べて分析的に文章化 ③他者の気持ちの描写、依頼など、社会性を学び、メタ認知を深めることにつなげるという流れで指導を進めると良い。

講演後の質疑応答では、現在の生徒手帳で取り組んでいたことを生かしていくには、手帳の使い方にも柔軟性が必要であることなどを御教示いただいた。

5 教科等横断的な取組について

1年目の取組において、第2学年の修学旅行先を沖縄県に設定し、その実施に向けた探究活動を行う計画をした。探究活動を行うに当たっては、思考するための前提となる知識、技能、経験を得る学習が必要であると考え、そのための学習を教科等横断的に実施した。



沖縄修学旅行は延期となったが、教科等横断的な学習から探究活動につなげる流れは残し、年度末に探究活動の発表会を行うことで、活動のまとめができるようにした。

<教科等横断的な取組の実際>

・令和元年度

主に社会科で、世界の地理、日本の地理、地球規模での環境の問題について、調べ、情報を共有し、意見を交換して考える学習を行った。

・令和2年度

国語科

「ひめゆりの塔」

6月	1時限	時代背景や、戦時中の同世代の若者の生活の様子を知る。
	2時限	戦争に巻き込まれた若者たちの行動や気持ちを読み取る。
	3時限	物語をとおして、自分が感じたことをまとめる。

詩「ウージの唄」

6月	1時限	詩を読み、詩が作られた背景を考える。
	2時限	詩の内容を捉え、一番伝えたいことを読み取る。

方言について

12月	1 時限	<ul style="list-style-type: none"> ・ 沖縄の人の会話を動画で見て、興味をもつ。 ・ 沖縄の方言を聞き、標準語との違いを知る。
	2 時限	<ul style="list-style-type: none"> ・ 方言と共通語の定義を学び、日本語には地域独特の表現があることを知る。 ・ 沖縄の方言で会話をしてみることで、共通語との違いを知る。

「目撃者の眼」

12月	1 時限	話の大まかなあらすじを知る。
	2、3 時限	報道カメラマン、オダネルの行動や気持ちをつかむ。
	3、4 時限	戦争について知ることとおして、自分の感じたことを文章にまとめる。

理科

10、11月	1 時限	生態系について
	2 時限	沖縄の動植物について
	3 時限	沖縄の動物調べ
	4 時限	沖縄の動物発表

音楽科

5 月	4 時限	沖縄ソングを歌ってみよう（臨時休業のため実施せず）
7 月	2 時限	歌唱「ウージの唄」（臨時休業のため実施せず）
10、11月	1 2 時限	器楽 三味線 歌唱 「海の声」

家庭科

7 月	2 時限	沖縄の衣食住について
7 月	2 時限	フェアトレード食品について
10月	2 時限	調理 「チャンプルー」 「ポーポー」

社会科

8、9月	1 時限	沖縄の地理的特色や特産品など調べたことを発表しよう
	2 時限	沖縄の歴史を知ろう
	3 時限	沖縄の特色を知ろう

ロングホームルーム

10月 から 2月	7時限	<ul style="list-style-type: none"> ・クラスごとに希望するテーマを話し合う。 ・決められたテーマについての研究活動 ・研究内容の発表に向けての準備 ・研究内容の発表
-----------------	-----	---

外部講師による出前授業

9月	1時限	地球環境の問題として、海洋ごみの状況について知り、自分たちの生活の中でできることを話し合う。
11月	1時限	<ul style="list-style-type: none"> ・マングローブ植林活動を題材に、光合成・地球温暖化防止等の学習 ・地球温暖化防止のために自分たちにできることは何かを考える

<探究活動>

- ・持続可能な開発目標 17 項目のうち、修学旅行に一番関係の深い4項目にしぼり、各クラスで分担をして調べ学習を行った。修学旅行事前学習を予定していたロングホームルームの時間及び宿題で対応し、教材は、共有で使用できる書籍を購入した。
- ・調べ学習の目的や手順の手掛かりとなるよう、生徒に分かりやすいスローガンとして、「そのために、自分たちが今の生活でできること・学校生活でできること」を挙げ、調べたことをまとめていく思考の手だてとした。
- ・調べ学習の方法などはクラスごとに考えた。調べた結果は、模造紙のポスターにまとめることを統一し、それを基に発表を行った。

項 目	主 な 内 容
7 エネルギーをみんなに、そしてクリーンに	風力発電、太陽光発電、航空機とエネルギー
12 つくる責任、つかう責任	ゴミについて、
14 海の豊かさを守ろう	海洋ゴミについて、サンゴの養殖について
16 平和と公正をすべての人に	平和・生命について

<取組の経緯>

令和2年度から、本校の修学旅行の行き先が従来の長崎から沖縄に変更された。その最初の学年となるのが、当該学年の第2学年であった。今までの長崎への修学旅行でも、平和、環境、その地域についての学習を行い、生徒が自ら考え行動をするような取組を行ってきた。今年度も、今までのねらいを大きく変更することなく、修学旅行に向けての学習を進めた。

沖縄県はかつての琉球王国の文化と、第二次世界大戦後のアメリカ統治の時代の文化の影響が残る独特な文化が形成されている。地理的には亜熱帯海洋性気候に属し、多くの固有生物が生息している。第二次世界大戦では国内で唯一の地上戦が行われ、多くの命が失われた場所でもある。そのため、このS

DGsの学習を進めるにあたって、本校の生徒にとって、平和や自然環境などの諸課題について考えていくために、とても分かりやすい教材になると考えた。

当初の予定では、令和2年1月、第1学年のうちに生徒に行先の発表をし、学習を本格的に始める予定であったが、臨時休業などの影響を受け、第2学年進級後の6月になってしまった。そのため、各教科で関連して取り組む予定のいくつかの単元で、できなくなってしまったものもあった。しかし、各教科の生徒の取組は、全体的に意欲的であった。それは自分たちの修学旅行の目的地である場所に関する学習であるという期待感によることが大きいと考える。

今回の取組、各クラスでの研究については、9月の外部講師による「海洋ごみ」に関する授業が大きなきっかけとなった。それまで生徒の中では、旅行に対する楽しさや期待感が先行していたものが、その裏には多くの問題があることをより具体的に知ることができた。そして、知るだけでなく、実際に自分たちで考える内容であったため、さらに理解を深めたいという気持ちが高まったようだ。

研究については、テーマを修学旅行の内容に関連する4項目にしぼり、クラスごとに話し合いを行って決めた。各教科の事前学習で取り組んでいた内容と重複することが多かったため、たくさんの意見が出て決めるのに難航したクラスもあった。クラスごとのテーマが決まってからは、教師に相談をしながら、具体的な内容や進め方など、積極的な意見交換ができた。

全クラスの共通テーマとして、課題解決のために現在の自分たちが日常生活の中で取り組めることを考えることを提示した。それぞれの課題は大きくても、一人一人が解決のために取り組むこと、継続することで、小さなことでも大きな結果を生み出すことができることに気付くことができたようだ。

<取組のまとめ>

沖縄修学旅行という目的をもって学習に取り組んだことで、従来からの取組にも、生徒の意欲や主体的に考えようとする姿勢が見られるようになった。新型コロナウイルス感染症拡大に伴う社会の大きな変化も、世界的な問題を自分にも関係することとして捉えることができるきっかけになったとも思える。

教科等横断的な学習、探究活動、修学旅行という流れを生徒が理解し、見通しをもって取り組むことにより、生徒が学習に主体的に関わることができたことは、推進校として、思考を支える学習の「型」の例として提示できたのではないかと考える。

生徒の探究活動については、教科等横断的な学習の様子から、ゴールとしてのスローガンを設定する以外は自由に取り組ませた。今後、教師の支援や、成果物としての発表ポスターなどから、生徒がどのような手順で思考をして、発表内容をまとめていったのかを検証することで、生徒の主体的な思考を促す学習をパッケージとして整理することができるのではないかと考える。

本校における取組としては、この取組を単学年で終わらせず、教科等横断的な学習を継続して進めていくためのカリキュラム・マネジメントの整理や、学級委員中心に短期的に行っている社会貢献活動とも関連付けていくことなどを検討していくことが挙げられる。

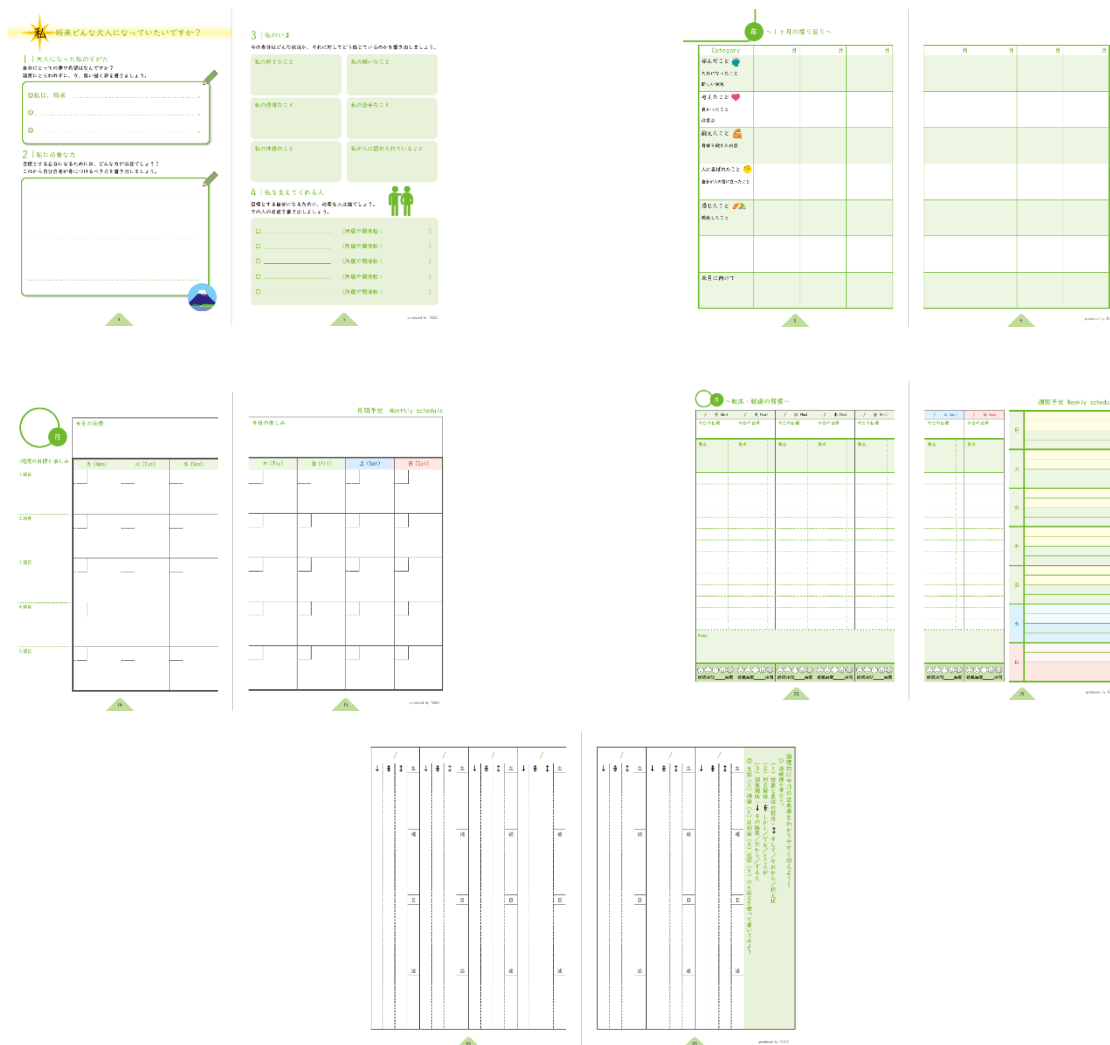
6 永福学園手帳について

1年目にたすく(株)より御紹介いただいた思考手帳をもとに、本校生徒が取り組む手帳の作成にあたった。思考手帳のコンセプトは維持しながら、本校生徒が使用することを想定し、修正点等を検討し、作成した。検討のポイントとしては、以下のような点を重視した。

- ・高等部生徒の生活年齢を考慮したデザイン、使用する言葉の選定
- ・療育場面での個別指導ではなく、学校で、主に学級担任の指導となることから、ページ内の項目の順序の検討や項目自体の削減
- ・本校でこれまで使用していた生徒手帳の使用との変化への対応（必要な記入枠の追加など）

完成した手帳は、後期（10月）から第2学年、翌11月から第1学年が使用を開始した。本来であれば、目標設定のページから開始するものであるが、まず使用感に慣れてもらうため、予定のページから使い始め、順次、目標や出来事日記のページに移行していった。

手帳は大別して5点のセクションがあり、それぞれの意図をもったページとなっている。



<目標設定のページ>

私

将来どんな大人になりたいですか？

1 | 大人になった私のすがた

自分にとっての夢や希望はなんですか？

現実にとらわれずに、今、思い描く夢を書きましょう。

◎私は、将来

◎

◎

2 | 私に必要な力

目標とする自分になるためには、どんな力が必要でしょう？

これから自分自身が身につけるべき力を書き出しましょう。


.....

.....

.....

.....

.....



4

3 | 私のいま

今の自分はどんな状況か、それに対してどう感じているのかを書き出しましょう。

私の好きなこと

私の嫌いなこと

私の得意なこと

私の苦手なこと

私の性格のこと

私が人に認められていること

4 | 私を支えてくれる人

目標とする自分になるために、必要な人は誰でしょう。

その人の名前を書き出しましょう。



..... (所属や関係性:)

..... (所属や関係性:)

..... (所属や関係性:)

..... (所属や関係性:)

..... (所属や関係性:)

5

produced by TASUC

特徴 検討の経過等

- ・義務、賞罰、強制などによってもたらされる外発的動機付けではなく、好奇心や関心によってもたらされる内発的動機付けを育むことを意図して設定しているページである。
- ・まず、将来の大きな目標を立て、その上で、そのために必要な力、自己分析、自分の周りの人的環境について記載する。大きな目標をもとに、より具体的な目標を設定していくための思考の材料として活用できるよう、項目の設定をしている。
- ・本校は2期制であることから、半期ごとに同ページを作成できるように設定し、自己を振り返る機会をもてるようにした。
- ・たすく(株)の思考手帳では、大きな目標を立てた次に、10年後の自分の姿を記載する欄があったが、就業技術科の生徒にとっては、10年後の具体的な目標を立てようとすると、就労に関する目標に偏ってしまう懸念があることから、欄を設けないこととした。
- ・目標が就労に関するものに偏らず、また、漠然としすぎないようにするためのキーワードを検討し、思考手帳にはなかった「大人」という言葉を冒頭の問いに入れた。

<月の振り返りのページ>

年 ~1ヶ月の振り返り~

Category	月	月	月
学んだこと 🧠 ためになったこと 新しい発見			
考えたこと ❤️ 良かったこと 改善点			
鍛えたこと 🏋️ 身体を鍛えた内容			
人に喜ばれたこと 😊 自分が人の役に立ったこと			
感じたこと 🌈 感動したこと			
来月に向けて			

8

月	月	月	月

9

produced by TASUC

特徴 検討の経過等

- ・半期ごとの目標ページ作成という、大きな振り返りのほかに、月ごとの振り返りのページを設定した。
- ・自己に関する肯定的な情報を整理し直すことで、自己肯定感を育み、次の行動への意欲につなげていくことをねらっている。
- ・漠然とした振り返りではなく、カテゴリーごとにしぼった振り返りをすることによって、自己の行動をより分析的に考え、論理的思考の力を育てていくことも期待している。
- ・月ごとの振り返りを、時系列で比較検証できるようにし、自己の変化に気づき、次の行動変容につなげていく内発的動機付けを育てていくことも、利用の継続によって期待できると考えている。

<月予定のページ>



1週間の目標と楽しみ

1週目

2週目

3週目

4週目

5週目

今月の目標			
月 (Mon)	火 (Tue)	水 (Wed)	

14

月間予定 Monthly schedule

今月の楽しみ			
木 (Thu)	金 (Fri)	土 (Sat)	日 (Sun)

15

produced by TASUC

特徴 検討の経過等

- ・ 目標設定ページを受け、月ごとの具体的な目標を記入する欄を設けている。
- ・ 目標のほかに、「今月の楽しみ」を記載する欄を設け、学校行事や週末の余暇活動等、自分が楽しみにしている活動に向けて努力する「強化システム」の理解を促す。これは、例えば将来、給料の入る日を楽しみに、仕事をするなど、直近では手に入らないものに向かって努力しようとする力である。
- ・ 月単位でのスケジュールを確認することで、少し先の見通しをもって行動できる力を育てていく。
- ・ 月の目標や楽しみを、更に具体的に明示できるよう、各週の左側に、週ごとの事項を記載する欄を設けた。
- ・ 予定の枠はできるだけシンプルにし、生徒が書きやすく、ある程度自由度のある設定にした。

<出来事日記のページ>

↓	⇄	↑	主	↓	⇄	↑	主	↓	⇄	↑	主	↓	⇄	↑	主
補				補				補				補			
目				目				目				目			
述				述				述				述			

86

↓	⇄	↑	主	↓	⇄	↑	主	↓	⇄	↑	主	↓	⇄	↑	主
補				補				補				補			
目				目				目				目			
述				述				述				述			

論理的に今日の出来事をわかりやすく伝えよう！

① 接続語を使おう。

(1) 抽象と具体の関係・↑そして／それから／例えば

(2) 対立関係・⇄しかし／でも／ところが

(3) 因果関係・↓その結果／だから／すると

② 主語(S) 補語(C) 目的語(O) 述語(V) の4語文を使って書いてみよう

87

produced by TASUC

特徴 検討の経過等

- ・ 論理的思考力を高めるため、「型」のある文章を継続して書く取組ができるよう、ページを設定した。
- ・ 基本の文として、主語、補語、目的語、述語の四語文を作成する。
- ・ 主語は、原則として自分「一人称」としている。日本語は主語を省略してもやりとりが成り立つこともあり、違和感もあるが、「私」から始まる文章を考えることが、自分の考えを相手に伝える力を育てることにつながっていく。
- ・ 作成した四語文に、接続詞を使って、「抽象と具体の関係（それは、例えば等）」、「対立関係（しかし、でも等）」、「因果関係（その結果、だから等）」の作文をする。
- ・ ルールのある文章作成を繰り返し実践することによって、思考の「型」をもつことができ、知的障害のある生徒の論理的思考力を支援することにつながると考えている。

7 取組の成果と今後に向けて

知的障害のある生徒が、論理的思考力を高め、将来に向けて主体的に考えることができることを目指し、2年間の取組を行ってきた。実践としては、まだ途についたばかりであり、現在の段階で生徒の変容を検証できるものではないが、実践を振り返り、成果と考えられる点と、今後に向けての整理を試みたい。

・生徒の主体的な学習場面の増加と、学習への意欲の向上

第2学年が、沖縄修学旅行に向けて、教科等横断的な学習を進めた。生徒にとっても、修学旅行という大きな目標、楽しみに向けた学習をすることで、学習の目的が明確になり、結果として学習意欲にも向上が見られた。例えば、地球温暖化に関する出前授業は推進校を受ける前から継続して取り組んでいたが、生徒の事前のワークシートによる取組や、当日の発言からは、課題を自分にも関係する事として捉え、自己の行動変容に触れるなど、主体的に学びに向かう姿が見られた。生徒が目的意識をもち、内発的動機付けによる学習意欲をもって取り組むことができるよう、今後に向けては、今回成果の見られた活動を分析し、計画的に指導に盛り込んでいくことが必要であると考えます。

・全校での取組としての手帳の活用

本校は卒業後の障害者雇用枠による企業等での就労を目指して、職業教育に重点を置いた指導を進めている。開校以来14年の歴史の中で、様々な変遷を経て、3年間での学習の流れを作り、実践をしてきている。学年ごとに「知る」、「選ぶ」、「決める」のキーワードの下、その学年で付けたい力を明確にしながら取り組んできているが、それに加えて、手帳の活用が3年間の変化を追うような日常的な取組として位置付くことによって、生徒が目的意識をもち、主体的に学ぶことにつながっていくものと考えます。生徒はもちろん、指導する教員側にも各ページの意図や書き方などについての理解が必要である。また、年度途中からの使用だったため、生徒によっては変化を嫌うような様子も見られた。マニュアルの作成や初期の指導のための動画教材の作成など、次年度以降の活用に向けた改善にも取り組んでいる。手帳の内容等については、使用している生徒の様子等を踏まえるとまだ改善の余地があり、今後の継続的な使用に向けて、組織的な対応ができるよう、校内体制の整備なども含めた検討を行っていかねばならない。

また、3年間継続して使用することでの成果検証の結果は、数年を待たなければならないが、思考を深め、表現力を高めた生徒たちが、さらに有効な手帳とするために自分たちの意見を表明していくことに期待している。

・パッケージ化した探究活動の設定

教科等横断的な取組と探究活動をパッケージ化した取組は、修学旅行が延期になり予定どおりの活動が実施できず試行錯誤しながらの実践となった。しかし、生徒の論理的思考を深めるためには、その材料となる情報が必要である。そこで、教科等横断的な取組と探究活動をパッケージ化して実践を進めてきた。今年度の活動のまとめとしては、探究活動の発表の場を設定し、これまでの学習が集約され、形として示すことができるようにした。次年度に向けては、再度修学旅行との関連付けも整理し、探究活動を継続して取り組むことができるようにするとともに、このパッケージが、教科等横断的な取組だけでなく、各授業の単元の中などでも意識して取り組めるようにしていくことが、生徒の論理的思考力を高めていく上で、今後に向けた課題となると考えている。